慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九四二年蔣介石のインド訪問
Sub Title	
Author	段, 瑞聡(Duan, Ruicong)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.3 (2010.) ,p.111- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20100331-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九四二年蔣介石のインド訪問

段　瑞聡

はじめに

一九四二年二月四日、蔣介石は連合国中国戦区最高司令官の身分で夫人宋美齢、国防最高委員会秘書長王寵恵、中央政治学校教育長張道藩、国民党中央宣伝部副部長董顕光および中国駐在イギリス大使カー（Archibald Clark Kerr）などと重慶から出発して、インド訪問の途についた。一行は昆明を経由して、四日夜にビルマ・ラショー（Lashio）に着き、翌日にインドのカルカッタに到着した。その後、蔣介石らは八日にニューデリーを訪問し、二一日にカルカッタより昆明に戻り、訪問を終えた。それは蔣介石にとって国民党と国民政府の指導者として初めての外国訪問であった。この時期は太平洋戦争が勃発して間もないころであるため、インド訪問には重要な意義があると考えられる。

では、蔣介石はなぜこの時期にインドを訪問し、その目的は何だったのであろうか。これまでの研究[1]では、蔣介

石がインドを訪問したのは国民会議派を説得し、他の党派およびイギリスと協力して、日本の侵略に抵抗し、同時に中印間の軍事協力を強化するためであると指摘されている。

しかし、近年公開された蔣介石日記[2]を通して、蔣介石のインド訪問にはより重要な目的と深い意義があったことが見て取れる。また、従来の研究では、蔣介石のインド訪問の歴史的背景に関する考察も不十分であった。本稿の目的は蔣介石日記などの新史料を利用して、彼のインド訪問の目的、背景とその意義を分析することにある。

周知の通り、太平洋戦争時期にインドはイギリスの植民地であった。当時国民政府軍事委員会委員長侍従室第六組組長唐縦の日記によると、もともとイギリス政府が蔣介石に国民会議派を説得し、イギリスと協力して敵に抵抗するよう依頼したという。蔣介石はそれを受け入れて、自らインドに赴く意思を表明、イギリスの歓迎の下、ついにインドを訪問することになった[3]。しかし、後述するように、蔣介石がインドの独立を支持することによって、イギリス政府の不満を招き、中英関係が悪化した[4]。そのような状況下で、蔣介石の革命理念はイギリス帝国主義と衝突した。インドの独立を支持するか、それとも連合国との関係を重視するか、蔣介石がジレンマに陥った。イギリスの圧力の下で、蔣介石はアジアの抑圧された民族を解放するという理念を放棄しなかったとはいえ、イギリスにインドの内政に干渉しないと表明せざるを得なかった。しかし、インド訪問時期の蔣介石の言論と日記からは彼の中華思想、反帝国主義意識および黄白人種闘争意識の側面が見て取れる。本稿では、蔣介石の中華思想と反帝国主義意識はどのような関係にあったか、また、一九四二年の蔣のインド訪問は、中華民国外交史と中国革命史においてどのように位置づけられるかを分析する。

一　近代以来の中印関係と蔣介石の歴史的使命感

一九四二年一月三一日に、蔣介石は日記で中印関係について次のように書いている。つまり、「歴史上、中印両国の関係は二千年にも及ぶ。接している国境がとても長く、二つの民族は世界において最大である。しかし、衝突あるいは武力戦争が生じたことは一度もなく、あるのは文化交流と礼儀の往来のみである。両者は世界で最も平和的民族である。このような両国の歴史を大事にし、大いに発揚させたい」という。歴史における中印両国のそのような関係は、蔣介石のインド訪問の重要な要素の一つである。とりわけ近代以来、中印両国はともに列強に侵略されており、孫文の時代から如何にして帝国主義の圧迫から脱するかは両国にとって共通した目標であった。

一九〇五年八月二〇日に中国同盟会が東京で成立した。一一月に『民報』が創刊され、章太炎が主編を担当した。そこではインドの独立運動を支持し、中印連合を主張する文章が数多く発表された[5]。一九〇七年三月に章太炎などは日本にいるインド人革命家とともに東京で亜洲和親会を成立させた[6]。その宗旨は帝国主義に反対し、アジアの主権を失った民族を独立させることである。その後、ベトナム、ビルマ、フィリピン、朝鮮などの革命活動家もそれに加わり、アジア民族解放統一戦線が形成されたといえる。

一九一一年三月、孫文はカナダのバンクーバーで日本人記者と会見した際、アジア同盟の設立およびアジア諸国とりわけ中国とインドを喚起することを強調した[7]。一九一三年八月、第二次革命が失敗した後、孫文は日本に亡命した。当時孫文の活動を監視した日本の警視庁の統計によると、一九一四年から一五年にかけて、孫文は二九回にわたってインドのラーシュ・ビバーリー・ボース（Rash Behari Bose）などの革命活動家と面会した[8]。孫文はそれ

らの活動家とともに革命の相互支援、武器のインドへの運送および反イギリス蜂起の発動などをめぐって検討した。[9]

孫文は『三民主義』講演においてガンジーの非協力運動に言及し、もし国民全体がインド人のように列強に協力せず、宗族を基礎として大きな民族団体を結成できれば、列強がいかなる兵力、経済力と人口をもって圧迫しても、恐れに値しないと主張した。[10]

一九二四年一一月二八日、孫文は神戸高等女学院で「大アジア主義」をテーマにして講演を行なった際、アジア諸民族の地位の回復、各民族の連合を唱えた。[11] 孫文が亡くなった後、彼のそのような理念は蔣介石をはじめとする国民党に継承された。

中印両国の文化交流を促進するために、一九三五年五月三日に南京で中印学会が成立した。[12] 中央研究院院長蔡元培が理事長、戴季陶が監事長に任じた。一九三七年三月タゴールが主宰する国際大学では中国学院が開設され、戴季陶と蔡元培が連名で祝電を送り、[13] 蔣介石は多くの書籍を寄贈した。

一九三七年七月に日中全面戦争が勃発し、中国軍民が奮起して日本に抵抗したことは、民族の独立を目指すインドに大きな影響を及ぼした。一九三九年八月二三日、国民会議派議長ネールは重慶に到着し、中国を訪問した。その目的は二つあった。一つは、中国の対日抗戦の実情を考察し、その経験と教訓をもってインド民族解放運動の鑑とすることであり、もう一つは国民会議派とインド人民を代表して、中国の対日抗戦に関心と同情を寄せ、中印両国が協力して民族の独立のために戦うことであった。

ネールの中国訪問に関して、蔣介石は日記で四箇所言及している。つまり、①一九三九年八月二六日：「正午ネールを招宴する」、②八月二六日の「今週予定表」：「インドとの合作計画の検討」、③二八日：「夜インドのネール同志を黄山に招き、インド革命の方策を語り合う。（中略）インド人がわが家で宿泊したのはネールが初めてであ

る」、④九月二日：「ネールと談話し、別れを告げ、中印合作の方法を協議する。彼の思想と言行は皆条理がある」である。

蔣介石が日記で言及した黄山は重慶郊外にある蔣介石官邸である。蔣介石が自らの官邸にネールを泊めたことから、彼が如何にネールを重視していたかがうかがい知れる。では、蔣介石はネールとどのようなことを議論したのであろうか。蔣介石の日記には詳しく書かれていない。しかし、筆者はスタンフォード大学フーバー研究所が最近公開した国民党特種档案から当時ネールが提出した「中印関係を発展させる意見書」を発見した[14]。意見書はもともと英文で書かれており、一〇ページにも及ぶ。この意見書は中国語に翻訳され、極秘文書扱いとされ、その表紙には蔣介石が陳立夫などに与えた直筆指示、つまり、「この意見に基づき迅速に具体的方法を検討せよ[15]」と書かれている。

陳立夫らがネールと検討した結果、以下三つの原則に基づいて合作を行うことになった[16]。第一、国民党が指導する国民革命の目的は国民会議派が指導するインド独立運動のそれと同じである。中国が日本に戦勝することはインドの独立運動が成功する先決条件である。インドはこのような時期に全力で中国に協力して日本に反対し、日英同盟を阻止するべきである。第二、国民党と国民会議派は秘密裏に密接に連絡を取る。まず宣伝の面から一致協力して、それから政治面における合作を行う。表面上各種文化合作事業の方式をもって、中印合作の基礎を築く。第三、中印間の各種活動は国民党と国民会議派が責任を持って推進する。前述した中印学会がその主な窓口とされた。そのほかに現有の宗教、学術、教育および社会などの機関団体を指定し、中印学会と協力して、各種文化合作事業に参加させることになった。ここからも分かるように、太平洋戦争が勃発する前に、国民党と国民会議派はすでに協力関係を築き上げた[17]。

一九四一年八月二四日に、蔣介石は重慶でインドのある女性革命家と会見し、アジアの抑圧された民族を解放し、とりわけインドの独立を助ける使命感がいっそう強まった。[18] 当日の日記で、彼は次のように書いている。「妻（宋美齢、筆者注）は彼女を見て、心中きわめて悲しくなった。彼女は笑う時も一種悲惨な様子で、きわめて悲しげであった。それを見て、列強の侵犯に抵抗すべき緊迫性が感じられた。さもなければ、後世の子孫らもインドと同じように亡国の悲劇を蒙ってしまう。われわれ夫妻はともに嘆き、自由がなければ、死んだほうがましだと思った。自強しなければならないのだ」という。

一九四一年八月二九日、蔣介石は日記で次のように書いている。つまり、「中国とインド両国の人口は合計で九億人に達し、世界人口の十分の六以上を占めている。この二つの国を完全に独立と平等な国家にしなければならない。そうしてはじめて、世界と人類が真の平和を勝ち取ることができる。中国革命は必ずこれを目的としなければならない」という。また、翌日の日記において、彼は「中国が独立と解放を勝ち取った後、その第一の重要任務はインドの解放と独立を助けることである。（中略）さもなければ、中国の国民革命は語るには値しない」と記している。一九四二年初、蔣介石は日記で本年度重要工作として一〇項目を挙げているが、その一つは「インド民族自治の促成」である。[19]

蔣介石が日記で最初にビルマとインド訪問に言及したのは、一九四二年一月二三日である。蔣は当日の日記で、「今ビルマとインドを訪問するのは最も時宜に適っており、それは戦後イギリスの植民地に対する重要政策の基礎になるものである」と記している。ここからも分かるように、蔣介石がビルマとインドを訪問するに当たって、最初に考えたのは戦後如何にイギリス帝国主義との関係に対応するかという問題であった。一月三〇日に蔣介石は日記でインド訪問の目的についてより詳しく書いている。つまり、①イギリスとインドに互いに譲歩し、協力するよ

う説得する。②インドに多く兵力を提供するよう説得する。③イギリスにインドの自治を認めるよう説得する。④将来の中印の協力の基礎を築く。⑤三民主義を宣伝することである。ここからも分かるように、蔣介石は英印関係を改善しようとしたばかりでなく、将来の中印の協力、三民主義の宣伝などの目的を有していたのである。同じ日の日記「予定」欄で、蔣介石は「総理大アジア主義講演原稿」と書いている。「大アジア主義」講演とは、一九二四年一一月二八日、孫文が神戸で行なった「大アジア主義」講演[20]である。蔣介石が宣伝しようとしている三民主義とは、主に民族主義で、具体的に言うならば孫文が強調した中国革命がアジアの抑圧された民族を支援し、解放を勝ち取るという政治理念であると考えられる。

蔣介石はビルマとインドを訪問することが「将来アジアの前途に大きな影響を及ぼすに違いない[21]」と期待していた。インド訪問後の三月二一日に、蔣介石は日記で「アジア諸民族の解放を勝ち取ることはわれわれ今後唯一の責務である」と明記している。以上で分かるように、蔣介石はアジアの抑圧された民族の解放を中国革命の主要任務としており、その使命感には非常に強いものがある。

二　太平洋戦争勃発後の中国とインド

一九四一年一二月八日に太平洋戦争が勃発した後、蔣介石はただちに米・英・ソ三カ国の中国駐在大使と会見し、友好国（中・英・米・ソなど）が軍事同盟を結成し、アメリカの指導下で共同作戦を行うよう提案した。一二月九日に国民政府は正式に日本、ドイツとイタリアに宣戦した。蔣介石はそのように迅速に対応すれば、米・英・ソに対する発言権を得ることができると考えていたのである[22]。一二月二三日に中・米・英三国軍事代表会議が重慶で開

かれ、蔣介石はそれが中国外交史における「空前の出来事」[23]であると自賛している。一二月三一日にルーズベルト大統領が蔣介石に電報を送り、連合国中国戦区最高司令部を設立し、蔣介石が最高司令官を担当し、中国、タイとベトナム各地域の同盟軍を指揮するよう提案した[24]。四二年一月二日に蔣介石はルーズベルトに返電し、連合国中国戦区最高司令官への就任に同意した[25]。それに先立って、一月一日に中国と米・英・ソなど二六カ国はワシントンで反侵略共同宣言にサインし、枢軸国に対し共同で作戦に当たるという声明を発表した[26]。共同宣言は米・英・ソ・中四カ国が先にサインしたため、ルーズベルトは中国が四強の一つになることを歓迎すると表明した[27]。蔣介石はそれによって国家と個人の名声と地位が有史以来最も向上したと評価している[28]。

しかし、蔣介石はそのような名声と地位が有名無実になってしまうのではと懸念していた。なぜなら、当時英米は中国ないし太平洋地域を重視しなかったためである。そのような状況に対して、蔣介石は日記で数回にわたって言及している[29]。たとえば、一九四二年一月七日の日記では、「英米の戦略思想は大西洋地域を主とし、太平洋地域を従とする。（中略）そのような考えを徹底的に変えさせなければならない。とりわけ米国に全力で太平洋地域を重視させ、日本問題の解決を第一目的とする」と記している。そのような状況下で、蔣介石はインド訪問を決意し、それをもって英米に中国を重視させようとしたのである。換言すれば、蔣介石はインドとの関係を強化することによって、英米との交渉を有利に運び、国際社会における中国の地位を向上させようとしたのである。

太平洋戦争勃発後、軍事戦略におけるインドの重要性がいっそう高まった。まず、インドは南アジアに位置しており、国土が広く、資源も豊富である。一九三九年九月三日、第二次世界大戦勃発後、インド皇帝を兼ねるイギリス国王がドイツに宣戦したため、インドも交戦国になった。第一次世界大戦時、インドは一四五万人の軍隊が動員され、九四万人が欧州戦場に送られ、そのうち三万七千人が戦死し、一一万人が負傷した[30]。しかし、第一次世界大

戦後インドは独立できなかった。そのため、国民会議派は再度イギリスにだまされないよう、一九四〇年三月に年次会議を開き、戦争への参加を拒否し、完全な独立を求めることを決議した。そのような背景から、イギリスは蔣介石に調停を求めたのである。

一九四一年の時点で、インドの人口は三億八八八〇万人である。[31] 人力と物資の動員の面から見れば、インドが重要な戦略的地位にあることが分かる。当時のインド軍司令官A. F. ハートリー将軍の報告[32]によると、インドの兵員数は一〇〇万あまりである。いかにインド軍民の力を発揮させるかは、連合国にとって重要な課題であった。

次にインドは中国と隣接しており、インドの安定は直接に中国の西南辺境に影響を及ぼす。当時、アメリカなどの対中援助物資はほとんどビルマルートで輸送されていた。しかし、一九四〇年七月にイギリスは日本の圧力によって、ビルマルートを三ヵ月間閉鎖したため、中国から外国に通じる道が閉ざされた。そのような状況下で、一九四一年二月に国民政府は新しい国際輸送ルートを開き、康印道路を建設することになった。[33] 太平洋戦争勃発後、日本の東南アジアにおける勢力が急速に拡大し、ビルマルートがいっそう脅かされた。蔣介石は一日も早く中印間の陸路と空路を開通し、対中援助物資を確保しようとした。[34] それは蔣介石がインドを訪問する要因の一つであった。

次いで日本勢力のインドへの浸透を防ぐことも蔣介石のインド訪問の要因の一つであった。太平洋戦争が勃発する前、日本はすでに東南アジア地域のムスリムとインド人に対して工作活動を始めていた。一九四〇年代、マレー半島にはインド人が九〇万人あまりいた。[35] また、シンガポールとマラヤに駐在するイギリス軍は主にインド人からなっていた。そこで、一九四一年七月ごろから日本参謀本部における「宣伝謀略」部門（第二部第八課）がマレー半島で工作活動を始め、それらのインド人兵を懐柔しようとした。[36]

それと同時に、一九四一年七月日本参謀本部でインド人工作を担当する門松正一はタイの日本大使館を訪れ、武

官田村浩と相談し、バンコクにあるインド独立連盟（India Independence League）を利用して工作を行うことになった[37]。太平洋戦争勃発後、インド独立連盟はマレー半島にいるインド民間人とインド軍人を対象に反英工作を行った。彼らの影響を受け、一九四一年一二月に英軍大尉モーハン・シン（Singh, Mohan）がインド国民軍を組織し、日本軍と協力することになった[38]。一九四二年二月一五日にシンガポール陥落後、インド国民軍はすでに二万五〇〇〇人に達した。

蔣介石は日本の東南アジアとインドへの浸透を懸念していた。一九四二年一月二日に彼は日記で次のように書いている。「ルーズベルト大統領から、大戦期間中いかにインドおよび南洋の植民地にその人力と物資を貢献させ、敵国に惑わされ、反乱を起こさせないようにするか、チャーチルに伝えてもらう」。「さもなければ、各植民地は最終的に必ず敵国に利用され、寝返ってしまう。それは軍事計画よりも重要視されるべきである」と。一月七日に、蔣介石は正式にルーズベルトに電報を送り、植民地地域における戦争の複雑さを強調し、チャーチルに対して、従来の植民地政策の改善を説得するよう求めた[39]。二月一〇日に蔣介石はインド総督リンリスゴーと会見した時、「今次の戦争では、宣伝の力が極めて大きい。敵が直接あるいは間接的宣伝を利用すれば、大きい効果が生じる」ため、「植民地で戦争するにあたっては、七、八分は宣伝戦で、二、三分が軍事戦である[40]」と主張し、日本勢力のインドへの浸透を阻止しようとした。

三　蔣介石による英印関係の調停

太平洋戦争時期、インド国内の政治勢力は党派で区分するならば、主に国民会議派、ムスリム連盟と藩王国とい

う三つの部分になる。[41] そのほかに、生活能力に欠ける貧しい階層が約一〇〇〇万人いる。

国民会議派はヒンズー教の利益を代表するが、その内部は三つの勢力に分かれていた。具体的には、①ガンジー派で、非暴力非協力運動を主張する。②ネール派で、連合国との合作を主張するが、その条件はインドの完全な独立である。③スバース・チャンドラ・ボース（Subhas Chandra Bose）をはじめとする急進派である。一九三九年九月第二次世界大戦勃発後、当時国民会議派議長であったS. C. ボースは敵の敵は友であると認識し、ドイツと日本と協力して、イギリスに反対するよう主張した。しかし、ガンジーらに反対されたため、S. C. ボースは国民会議派を離れ、独自に反英活動を行うようになった。一九四〇年七月にS. C. ボースはイギリス当局に逮捕されたが、[42] 四一年一月にドイツに亡命した。彼はそこで反英宣伝を行い、同時にインド人による軍隊の組織に着手した。四一年八月よりS. C. ボースは日本側と接触し始めた。一方、ジンナー（Muhammad Ali Jinnah）が率いるムスリム連盟は、一九〇六年にイギリスの支援で設立されたもので、その目的は国民会議派を牽制することにあった。[43] ムスリム連盟は約七五パーセントのムスリムを代表している。

国民会議派とムスリム連盟はともにインドの指導権を獲得しようとしている。そのため、両者の対立は非常に深刻であった。一九四二年二月一二日、蔣介石はインド労働省長官フィロズ・カン・ヌーン（Sir Firoz Khan Noon）と会見した。ヌーンはムスリムで、ヒンズー教とムスリムとの関係について、次のように述べた。「もしヒンズー教徒がインドを統治するなら、きっとムスリムを抑圧する。それによって、ムスリムの地位が現在よりも悪くなってしまう。現在、インドの統治権はイギリス人の手中にあるため、表面上みんな一致してイギリスに反対しているが、政権が一旦ヒンズー教徒に掌握されたら、内部の殺し合いが生じるに違いない。（中略）ヒンズー教徒とムスリムとの感情は実にきわめて悪い。ムスリムはイギリスの統治に反対するが、その統治権をヒンズー教徒に

渡したくはない[44]」と。また、ヌーンは「ネールは閣下（蔣介石、筆者注）がイギリス政府に圧力をかけ、国民会議派に政権を奪取させるために来訪したと認識している。しかし、われわれムスリムはインド政権を独占しようとする彼の企図に必ず反対する。閣下はムスリムの利益を妨害しないよう期待する」と蔣介石に釘を刺した。ここから分かるように、蔣介石とネールとの密接な関係がムスリムの反感をかったのである。

二月一七日に、蔣介石はカルカッタでムスリム連盟総裁ジンナーと会見した。ジンナーもヒンズー教徒のムスリムに対する差別が日増しに強まってきていると強調し、もしヒンズー教徒がインドを統治するなら、藩王国とムスリムは必ず立ち上がって反対すると述べた[45]。また、ジンナーはムスリムの主張はインドを二つの国に分けることであり、それ以外いかなる方法も受け入れないと強調した。当時ムスリムはベンガルとパンジャブ両州でムスリム政権の設立を望んでいた。その両州は六五パーセントの住民がムスリムであるためである。ジンナーはムスリムがイギリスの統治に不満ではあるが、日本の侵略に反対する戦争には参加したいと表明している。

しかし、蔣介石のジンナーに対する印象はよくなかった。蔣は会見当日の日記で、次のように書いている。「この人（ジンナー、筆者注）は言行が実にくだらなく、ごろつきで、きわめて嫌らしい。かろうじて三〇分会談して別れた。（中略）イギリス人が喧伝しているヒンズー教とムスリムが協力できないというのは事実ではないことが裏付けられる。真に国を愛しているムスリムの多くは国民会議派とガンジーに賛成している」と。二月末の「今月反省録」においても、蔣はジンナーをブローカー、ごろつきと称し、語るに値しないと評している。

では、蔣介石はなぜ上述した印象をもつようになったのであろうか。それは彼が国民会議派議長アーザードとネールの説明を信用したからであると考えられる。二月一一日に蔣介石はアーザードとネールと会見した。アーザードは「いわゆる内部紛糾の問題は、インドにおいては実際上存在しない。およそ開明的ヒンズー教徒とムスリムの

見解はそれほど食い違いがない。しかし、イギリス人が極力不和の種をまいたため、双方が猜疑し、嫌悪するようになった[46]。ネールはアーザード本人がムスリムであることを蔣介石に伝え、アーザードが「ヒンズー教徒と同様で、インドの自由を求めている。たとえイギリス人が離間させようとしても、彼の考えを変えることができない」と強調した。しかし、二月一二日に労働省長官ヌーンがわざわざ蔣介石に意見書を送り、「ネールはきっとアーザードがムスリムであるため、ムスリムも国民会議を擁護すると言うに違いない。しかし、それはでたらめな話である」と訴えた。それにもかかわらず、蔣介石はヒンズー教とムスリムとの対立がイギリスの煽動によって生じたものであると信じ込んでいた。

では、王侯たちはイギリスの植民地支配およびヒンズー教とムスリムとの関係について、どのような態度をとっていたのであろうか。二月一二日に蔣介石は王侯ノワブ（Nowab Bhopoll）と会見した。ノワブは「われわれはイギリスの統治にもちろん完全に満足したわけではない。（中略）もしイギリスが何らかの約束をするなら、ヒンズー教とムスリムとの争いを引き起こすに違いない。しかもわれわれ藩王国も受け入れられない。（中略）インド国民がまず侵略者の日本とドイツと戦うべきで、しばらくイギリスとの政争を取りやめ、戦争終結後、政権返還の問題を検討すればよい[47]」と主張した。ここからも分かるように、反侵略という点において、王侯らとインド政府が一致していたのである。

インド各党派と政界人士との会談を通じて、蔣介石はインド内部政情の複雑さを認識させられた。そこで、彼は調停の重点をインド総督リンリスゴー、ネールとガンジーにおくことにした。

二月一〇日に蔣介石はニューデリーでインド総督リンリスゴーと会見した[48]。総督は蔣介石にインドの情勢を紹介し、インドを独立させる可能性について、できないとはっきりと答えた。なぜならインドが独立した後別の国がイ

ンドを操る可能性があるからである。それに将来インドの国防費が膨大であるため、大部分のインド国民がそのような負担を背負って、完全に独立することを望んでいない。そのような状況からして、インドに完全に独立させるには時期尚早であるという。しかし、総督はインドに自治領の地位を与えることには問題がないと述べた。とはいえ、総督は現時点ではいずれの党派も円満に執政することができないため、徐々に政権を返還すべきであり、さもなければヒンズー教徒とムスリムとの殺し合いを引きおこすに違いないと強調した。しかも総督は政権返還の時期が早ければ早いほど、その衝突が激しくなると主張した。総督のそのような意見に対して、蔣介石は「大体賛同する」と表明する一方、「もし自分がイギリス政府なら、現時点で間違いなくインド自治の期日を宣告するし、もし自分がインド国民であるなら、この時絶対に完全な独立を求めない」と自らの意見を述べた。それは戦時英印関係に対する蔣介石の基本的考えであるといえる。

では、蔣介石はどのようにネールを説得したのであろうか。二月五日蔣介石はカルカッタに到着した後、ネールが一九三九年訪中した時に提出した「中印関係を発展させる意見書」を検討し、ネールの「見解と学問が非凡である」[49]と評価した。二月二一日、蔣介石は「インド国民に告げる書」を発表する前、わざわざネールの意見を求めた。[50]蔣介石がいかにネールを重視したかがここからも分かるのである。そのゆえ、蔣介石が訪印期間中ネールと三回にわたって会談を行ったのである。

二月一一日に蔣介石は国民会議派議長アーザードとその執行委員ネールと会見した。蔣介石は革命を行うには直接的方法と間接的方法があると指摘した。[51]直接的方法とは武力をもって政権を倒すことで、間接的方法とは政治的手段で目的を実現することである。蔣介石からみれば、インドの革命は間接的方法で行うべきであった。なぜなら、蔣介石は武力による革命の犠牲が大きすぎると認識していたためである。彼は中国革命を例にして、次のように説

明した。つまり、「わが国では総理が革命を起こして以来、すでに五〇年が過ぎた。（中略）われわれはすでに清王朝を倒したが、外国の帝国主義が依然としてわれわれをしっかりと束縛している。（中略）われわれは完全な自由を得たわけではなく、経済と政治面において依然として帝国主義の影響を受けている。では、われわれがどれほど犠牲を払ったのであろうか。犠牲というならば、それは非常に大きいものである。空襲による受難者を除いても、数百万の人民が命を落とした。それは武力革命の悲惨な代価である」。そのようなことから、蔣介石はインドがまず自治領の地位を勝ち取って、それから独立すればよいと提案した。しかし、アーザードとネールはイギリス政府にただちに政権をインド国民に返還するよう要求した。

二月一二日に蔣介石は再度ネールに戦時まず自治領の地位を受け入れ、それ以上の要求をせず、それをもって戦後講和会議に参加する資格を獲得するよう提案した[52]。しかし、ネールはそれに応じなかった。二月一七日夜、蔣介石はカルカッタでまたネールと三時間にわたって会談を行った[53]。蔣はまず中印を取り巻く革命環境の相違を説明した。つまり、①インドの交通は非常に発達しており、革命根拠地を建設するには不利であるため、武力革命は容易ではない。②武力革命を行うためには軍隊がなければならない。しかし、国民会議派は独自の軍隊を有していない。③一般人民の知的水準が不十分で、革命の人材が不足している[54]。一方、蔣介石はインド革命には二つの有利な条件を有しているとも強調した。一つは世界の知識人の八〇ないし九〇パーセントがインドの独立に同情しており、それは革命を達成するための最大の力となる。もう一つは、現在インドの植民地政権はすでに衰えていることである。

そのような状況に鑑み、蔣介石はネールに対して教育と外交という二つの面からイギリスと戦うよう勧めた。つまり、世界大戦の機会を利用して、積極的に参戦し、連合国と密接な関係を築き、世界の同情を獲得する。それと同時に、国内では教育を発展させ、軍事と政治面の幹部を育成し、積極的に準備を進める。蔣介石はもし戦時中連

合国の同情を得られるなら、講和会議の時に各国が助けてくれるに違いないと主張した。反対にもし積極的に参戦せず、協力しなければ、連合国の同情が得られないばかりでなく、すでに勝ち取った同情も失ってしまう。そうすれば、革命は永遠に成功の望みがないと蔣は強調した。しかし、ネールはガンジーの非暴力非協力運動が非常に有効であると主張した。なぜなら、その運動を通じて、インドの民衆がイギリスを恐れなくなり、それによって民衆を組織することができるようになったとネールは認識していたためである。そのような状況を見て、蔣介石はネールに対して、英印政府に対する攻撃をしばらく中止してほしいと求めたが、ネールははっきり断った。

蔣介石とガンジーとの会見は幾多の曲折を経た。もともと蔣介石は自らワルダ（Wardha）に赴きガンジーを訪問しようとした。しかし、二月一〇日にカー大使は蔣介石に対して、ニューデリーでガンジーと会見してほしいという総督の意思を伝えた[55]。なぜなら、総督はもし蔣介石が自らガンジーを訪問するなら、ガンジーの地位を向上させることになり、総督としての面目を失い、イギリス政府から処罰されると懸念したためである。それを聞いた蔣介石はかなり失望した。訪印前、イギリス政府は蔣のガンジー訪問に同意していたため、蔣介石は騙されたと思い、ガンジーとの会見を取りやめることにした。二月一二日にチャーチルはまた蔣介石に電報を送り、ワルダに行かないよう求めた。翌日、蔣はチャーチルに返電し、ワルダ行きを断念する旨を伝えた。しかし、二月一四日に蔣介石はガンジーの手紙を受け取り、「それを読んで、悲しくて眠れなかった[56]」。そこで、蔣介石はインドを離れる前にガンジーと会うことに決意した。彼はイギリスに対するガンジーの態度を変えさせ、連合国の共同作戦に協力するよう説得しようとしたのである。

二月一八日に蔣介石はカルカッタ市内のある公園にあるガンジーの友人の家でガンジーと五時間にわたって会談を行った[57]。ガンジーは自らの発動した非暴力非協力運動が第一号の武器であると称し、それが百パーセント正しい

と強調した。それに対して、蔣介石は「もしインドが独立できなければ、中国も独立できない。もし中印二つの民族が独立できなければ、全世界もまた自由が得られず、真の平和もありえない。もし中印が今次の戦争に参加しなければ、将来講和会議に参加することもできず、真の世界平和も実現できない」と強調した。蔣はもし国民会議派が主張を変え、参戦するならば、講和会議に参加する資格が得られるに違いないと主張した。もし中国だけが参戦して、インドが傍観し、あるいは中立の態度をとるならば、それは中印両民族の損失であるだけでなく、人類解放史における最大の遺憾であると訴えた。それに対して、ガンジーは中国の抗戦に同情を示し、イギリスの中国への援助を妨害しないと表明するが、中印両国がともに奮闘し、自由を勝ち取ろうという蔣介石の要望に答えず、手回し紡ぎ機で、綿を紡ぎ始めてしまった。これでガンジーとの会見が終了した。

ガンジーのそのような態度に対して、蔣介石はひどく失望し、当時の心境を日記で次のように記している。つまり、「自分が期待しすぎたかもしれない。彼は英人の統治を受けた苦痛によって今日のように冷酷で無情になってしまった。いかなる革命の情熱でも彼の無情さを変えることができない。彼の考えをまとめて言うならば、彼はただインドだけを愛し、世界および他の人類がいることを知らない。きわめて無情であるといえる。それはインド哲学と伝統精神がならしめたのである。つらさをこらえることだけ知って、少しも情熱がない。実に革命の首領の特徴ではない。インドの革命は成功しがたいと断言できる」[58]という。二月末の日記「今月反省録」で、蔣はまた「ガンジーが不誠実で、利己的であるかどうかは予断できない。しかし、その冷酷さと我慢強さははなはだしいものである」と書いている。さらに、一九四二年末の日記「総反省録」で、蔣介石はガンジーがあまりにも偏狭・強情であると批判し、それによってインドの民族解放が遅れてしまうと指摘した。以上から分かるように、蔣介石とガンジーの間には相互信頼が欠けていた。それは蔣介石の調停が失敗した主因の一つである。

四　英印関係の悪化と調停の失敗

一九四二年二月二一日午後五時半、蔣介石一行はインドを離れ、一〇時半に昆明に到着し、インド訪問を終えた。帰国する前、蔣介石はインドラジオ放送局（All-India Radio）カルカッタ支局を通じて、「インド国民に告げる書」を発表した。[59] イギリス政府の要求に基づき、蔣介石は日本軍の暴行を強調した。それと同時に蔣はインド国民に「大西洋憲章、ルーズベルトとチャーチルの宣言およびワシントン二六カ国反侵略共同宣言を擁護し、一致して奮闘し、手を携え自由の世界を勝ち取るために戦場に赴き、最終的勝利を収める」よう呼びかけた。蔣介石がここでインド国民に大西洋憲章の擁護を呼びかけたのは、表面上連合国に対するインド国民の支持を得るためである。しかし、それだけではない。蔣介石は英米が大西洋憲章の理念を全世界に通用させ、各民族が自由にその政府の形式を選ぶ権利を尊重するよう望んでいたのである。なぜなら、当時チャーチルは大西洋憲章の原則はインドないし中国に適しないと考えていたためである。[60]

「インド国民に告げる書」の最後の段落で、蔣介石はイギリス政府に対して、「速やかにインド国民に政治上の実権を付与し、それをもって彼らの精神的および物的力を発揮させる」よう呼びかけた。当日の日記で、蔣介石は「『インド国民に告げる書』を発表したのは、完全にインドの解放を助けるためである。イギリス政府は理解できないかもしれないが、それはイギリスにも実に有益であると信じている」と書いている。ここからはインドの独立を支援する蔣介石の意志が見て取れる。

帰国後、蔣介石は二月二二日からイギリス駐在中国大使顧維鈞にたびたび打電し、チャーチルにインド問題の重

要性を伝えさせ、迅速に解決するよう求めた[61]。同時に、二月二六日に蔣介石はアメリカ滞在中の外交部長宋子文に打電し、ルーズベルトにイギリス政府を説得し、対印政策を変更するよう求めた[62]。電報では、蔣介石はインド問題が合理的に解決できるかどうかは太平洋ないし地中海地域における戦争の行方を左右すると強調した。前述したように、蔣介石はインド各党派の対立、英印間の非協力は、みなイギリス政府の分断政策によるものであると考えていた。そこで、蔣はインドの政治状況を変え、インド国民に政治上の実権を与えてこそ、はじめてインドを指導して枢軸国に抵抗し、日本の侵略を阻止することができると主張した。さもなければ、インドが動揺したら、イギリスが危ないばかりでなく、東洋の戦局も全部敗北してしまうと強調した。しかし、ルーズベルトは積極的反応を示さなかった。

一方、イギリス政府はインド問題の深刻さを認識した。一九四二年三月一一日に、イギリス政府は国璽尚書スタッフォード・クリップス（Stafford Cripps）をインドに派遣した[63]。クリップスは三月二三日にニューデリーに到着し、二五日よりアーザード、ジンナー、ネールとガンジーなどと交渉を行った。クリップスは大戦終結後ただちに新憲法を制定し、新インド連邦を成立させ、インドに自治領の地位を与えると提案した。しかし、国民会議派はクリップスの提案を拒否し、国民政府の成立に固持した[64]。イギリス政府はそれに同意せず、四月一二日にクリップスは帰国し、交渉が決裂した。

蔣介石は一貫して英印交渉の成り行きに注目していた。彼は英印関係の決裂が大局および東アジアにとって最も不幸なことであると認識し、「イギリスの政策は極めて強情でつたない。敵に占領されても、インド国民に返還しようとしない」、イギリスは利己心が強すぎると[65]批判した。英印交渉が決裂した後、国民政府内では中米が調停役を買って出るべきだという声が上がった。しかし、蔣介石は「時期尚早で、静観すべきである[66]」と判断した。蔣介

石は理念上インドの独立を支持するが、イギリスの圧力に直面し、しかもルーズベルトの支持も得られなかったため、静観の態度をとらざるを得なかったと考えられる。

六月一四日にガンジーは蔣介石に手紙を送り、イギリスにインドからの撤退を求める理由を説明した[67]。しかし、蔣介石はガンジーのそのような政策が間違っていると批判した[68]。同時に蔣介石はガンジーが自分に手紙を送ってきたのは、中米に英印問題への介入を望んでいるからだと考えたが、それが不可能なことであると認識していた[69]。そればかりでなく、六月二二日に蔣介石は立て続けに宋子文に二通の電報を送り、ガンジーからの手紙の件をルーズベルトに伝えさせ、ルーズベルトに中国がイギリスの内政に干渉する意思がない旨をイギリス側に伝えるよう依頼した[70]。それと同時に、蔣介石は依然としてアメリカが調停役を買って出ることを望んでいた。

六月二五日に蔣介石は中国駐在イギリス大使シーモア（Sir Horace Seymour）と会見した。シーモアはもしガンジーが反英運動を発動するなら、インド政府が取締りをすることを蔣介石に伝えた。それに対して、蔣介石はインドのことはイギリスの内政に属し、口を挟むつもりがないと表明した[71]。同時に、蔣はガンジーに手紙を送り、「目下日本の侵略がわれわれにとって最も差し迫った災いである。われわれアジアの国が反侵略連合国と一致共同してこの大きな災いに対応するべきである。ゆえに連合国の利益はすなわち中印両国の利益であり、またインドの利益もすなわち同盟陣営全体の利益である。この点は同盟諸国に理解されるべきである」と強調した[72]。それと同時に、蔣介石はガンジーの手紙を宋子文からルーズベルトに転送させ、ルーズベルトの意見を求めた[73]。ルーズベルトは蔣介石から、ガンジーに、極端に走って敵に利用されぬようにと説得させた[74]。七月六日に蔣介石はインドに駐在する中国外交部の専門要員沈士華に打電し、ネールとガンジーに対して、このような時期に国民会議派が連合国の同情を得るため、極力忍耐するべきであると伝えるよう指示した。

しかし、蔣介石の意見は受け入れられなかった。七月六日に国民会議派執行委員会はワルダで会議を開き、一四日にガンジーの主張したイギリスのインドからの即時撤退を求める案が決議され[75]、英印の対立がいっそう激化した。七月二四日に蔣介石は再度ルーズベルトに打電し、アメリカが公正な態度でイギリスを説得し、合理的で適切に問題解決するよう求めた[76]。しかし、八月八日にルーズベルトは蔣介石に返電し、イギリスに忠告しないほうが賢明であると主張した[77]。

同じく八月八日に国民会議派全国委員会において「インドを立ち去れ」決議が可決された。翌日に、ガンジー、ネールなど国民会議派の主要な指導者が逮捕され、イギリスと国民会議派との関係が完全に決裂した。八月一〇日に蔣介石はガンジーらが逮捕されたことを知ると、ただちにルーズベルトに打電し、正義を擁護して、インドの情勢を緩和させるよう呼びかけた[78]。八月一一日に蔣介石はまたインド駐在中国外交部専門要員の沈士華に打電し、ガンジーを慰問する書簡をネールに手交し、あるいは口頭で慰問の意を表するよう指示した[79]。蔣介石はそれをもってインドに対する姿勢が一貫して変わらないことを示そうとしたのである。

同じ日に、蔣介石はイギリス大使シーモアと会見した[80]。蔣はイギリスの内政に干渉する意思がないことを表明すると同時に、ガンジーによるイギリスのインドからの即時撤退要求が非現実的であると指摘した。一方、蔣介石はインド人民が自由を望んでいる気持ちに同情するとも表明した。同時に、蔣介石はもし英印関係が決裂し、中国もイギリスに追随してインドと対立するならば、インドは絶望し、日本に寝返ってしまうことを懸念していた。そこで、蔣介石は中国がイギリスと同様な態度でインドに対応することができないと強調し、シーモア大使に理解を求めた。

八月一二日にルーズベルトは蔣介石に返電し、もし英印双方が求めるなら、よろこんで協力すると述べた[81]。しか

し、八月三一日にチャーチルは蔣介石に打電し、自らが首相あるいは内閣メンバーである限り、イギリス国王兼インド皇帝の全権に影響を及ぼす問題に関する調停を受け入れないと表明した。[82] チャーチルはまた国民会議派はインドを代表することができず、連合国同士が内政不干渉という原則を遵守すべきだと強調した。

それに対して、九月一四日に蔣介石は日記で「チャーチル首相が送ってきた電報は、インド政策に対する彼の頑迷な意志を表しており、しかも威嚇の意を有している。またインド問題をわが国の共産党の問題に例えており、そのようなでたらめな言説は一笑するしかない」[83]と書いている。翌日の日記において、蔣介石は「われわれはインドの自由とアジア諸民族の平等と平和を対英米外交の方針の基礎にするべきである」と記している。ここにいたっても、蔣介石はインドの独立を助ける夢を放棄しなかった。しかし、その後蔣介石は英印関係に関与しなくなり、インド問題は一段落した。

では、蔣介石による英印関係の調停がなぜ失敗したのであろうか。陳謙平がその原因として以下五点を挙げている。[84] つまり、①イギリスがその殖民地支配に固持し、インドの独立に関して誠意が足りなかった。②インド国内各派の政見が一様ではなかった。③国民会議派の政策決定のミス。④蔣介石自身の失策。⑤アメリカの非協力である。

筆者は基本的に陳の意見に同意するが、④に関しては検討する余地があると思う。陳が二つの面から蔣介石の失策を指摘している。一つは、蔣介石が中国の国際的地位に対して楽観的であったこと、もう一つは蔣介石が過度に国民会議派を重視し、ムスリム連盟の勢力を軽視したことである。前者に関しては、太平洋戦争勃発後、中国は名義上四強の一つになったが、英米は中国を重視しなかった。そこで、筆者は当時蔣介石が中国の国際的地位に対して必ずしも楽観視していなかったと認識している。後者に関して言えば、確かに蔣介石は国民会議派を過度に重視し、ムスリム連盟などの勢力を軽視した。事実、一九四二年八月一二日にシーモア大使と会見した時に、蔣介石は

「個人的には国民会議派がインド問題のキーポイントであると思う。もし国民会議派の問題を解決できるならば、インドの他の問題は自ずと解決できる」[85]と指摘した。また、前述したように、蔣介石はムスリム連盟総裁ジンナーに対する印象がよくなかった。蔣介石のそのような態度はムスリム連盟の反感を買った。蔣介石がインドから帰国した後、ジンナーが声明を発表し、蔣介石がインド政局の複雑さとその全貌を知らないと批判した[86]。

筆者は蔣介石のインド政局に対する判断のミスは調停が失敗した最大の原因であると考えている。蔣介石はインド各党派の対立、英印間の対立の根源がすべてイギリスの分断政策にあると認識していた[87]。そこで、蔣はもしイギリスが政策を変更すれば、インド人のイギリスに対する反感がなくなるばかりでなく、インド人民がイギリスの誠意によって感化され、忠誠を尽くすと考えていた[88]。しかし、現実は蔣介石が認識していたものとかけ離れていたのである。

また、ネールは蔣介石と国民政府に対して完全に信用したわけではない。一九三九年ネールは中国を訪問した後、イギリス人友人に対して、中国で見たのは独裁者（蔣介石、筆者）であり、国民政府にはまったく民主の精神がないと語ったといわれている[89]。それこそネールとガンジーが蔣介石の調停を受け入れなかった主因だと考えられる。

しかし、蔣介石は帰国後も、インドの独立を助け、アジア諸民族を解放する夢を捨てなかった。一九四二年三月二一日の日記で、蔣は「努めてアジア諸民族の解放を求めることは今後唯一の責務である」と書いている。一九四七年にインドがついに独立した。蔣介石はそれが「アジアの最大の進歩と一生の願い[90]」であると喜んでいた。彼はインドの独立を認めるイギリスの政策を評価すると同時に、中国の抗戦がその政策決定に最大の影響を及ぼしたと自賛している。蔣介石はインドの独立を一貫して支持してきたといえる。

五　蔣介石のインド訪問と反帝国主義意識

蔣介石は帰国後、その訪問に対する国内外の評価を非常に重視していた。インドから帰国する際、蔣介石は宋美齢に対して惜別の感があるかと聞いたら、宋は全くないと答えた[91]。蔣介石も同様な感想をもっていた。明らかにインド訪問が蔣介石に与えた印象はよくなかった。それにもかかわらず、彼はインド訪問が「生涯で得がたい経験である[92]」と評価している。

蔣介石のインド訪問の成果として、中印関係の強化が挙げられる。一九四二年二月一六日に蔣介石はインド軍司令官A. F. ハートリーと会談し、中印間の陸路と航空運輸について話し合い、アッサム（Assam）州のサディヤ付近で大型空港を建設することに合意した。四月二日に中英間で「中印航空協定」が結ばれた[93]。八日にアメリカ空軍輸送機が初めてヒマラヤを越え、重慶―昆明―カルカッタ間の航空路が開通された。それは戦時中国が外国の援助を獲得するための重要な生命線になった[94]。また、インドは二月一五日を「中国の日」と定め、中国も三月一七日を「インドの日」と定め、それぞれ記念行事を催した[95]。五月に中国とインドがそれぞれニューデリーと重慶で外交専門要員官署を設立し、中印間の協力がいっそう強化された。

一方、蔣介石がビルマとインドを訪問する時期の日記から、彼の中華思想が根強いものであったことが見て取れる。一九四二年二月五日に蔣介石はビルマのラショーからインドのカルカッタに移動した。当日の日記で彼は次のように書いている。「八時半にイラワジ（Irrawaddy）川を通る。その両岸は地勢が平らで、植物が青々と茂っている。川の水が清らかで、ミッチーナー（Myitkyina）まで航行できる。その辺は四〇年前みなわが国の山河であ

った」と。また、二月七日の日記「先週反省録」で、次のように書いている。「初めてビルマ経由でインドに到着した。途中経由したところは昔みなわが国の国土であった。ビルマ、シャム、ベトナムの歴史と地理を読むと、国土を失ったことに恥じざるを得なくなった。また、唐、明時代の国土の広大さと東亜民族の繁栄を考えると、自らこの重任を背負い、わが民族の光栄なる歴史に報いざるを得ない」という。蔣介石はここで唐と明の時代だけを強調し、清王朝には言及しなかった。なぜなら、清王朝は蔣介石にとって革命の対象であったためである。

二月一一日に、蔣介石はインド総督府前の広場で閲兵した。当日の日記で、彼は「ある部隊の兵士は体が小さいが、腕利きである。彼らの顔つきから見れば中国西部の廓爾喀である」と書いている。ここでいう廓爾喀はネパールのことであるが、蔣介石はそれを中国の一部としている。二月一三日に蔣介石はニューデリーからインド西北部の国防根拠地ペシャワルを視察し、インド・アフガニスタン国境にあるカイバル峠で現地の住民から歓迎を受けた。蔣介石は当日の日記で、「ここまで来て実に感無量である。思うにそれらの民衆は三十年前みなわが国の国民である。その大部分は、ブータン、シッキムの者である。そこで思わず彼らを同胞と称した。ある八〇歳の年配者がいた。彼はきっと自分が中国人であることを知っている。残念ながら言葉が通じなく、しかも州知事もいるため、詳しく聞けなかった。今回インドに来て、これは唯一痛快なことである」と書いている。

以上の蔣介石の日記から彼の中国の旧属領に対する認識が見て取れる。彼は三月一四日の日記「先週反省録」でまた次のように書いている。「最終的目的は失地を取り戻し、従来の領土と民族固有の地位を回復することである。それをもってアジア諸民族を解放する基礎とし、彼らをしてみな平等と自由を得られるようにする」と。蔣介石がここでいう「従来の領土」は上述した属領を含むかどうかは知るよしもないが、彼の中華思想は火を見るより明らかである。蔣介石のそのような中華思想は、彼の反帝国主義意識と密接に関連している。

蔣介石はインド訪問を通して、イギリスの植民地支配に対する理解が深まった。さらに言うならば、インド訪問期間の言論と日記から、彼の反帝国主義意識と黄白人種闘争意識の強さが見て取れる。一九四二年二月六日に蔣介石はカルカッタ郊外にある銃器工場と製鋼工場を見学した。二月七日の日記で彼はインドに関する印象を次のように述べている。「（インド）人民は痩せていて弱々しい。生活状況も非常に悪く、わが国の租界と香港・九龍のクーリーよりも酷い。とりわけその不潔さが凄まじい。しかし、外国人の待遇は格別によい。まことに月とすっぽんの差である。ここ三日間実際にインドの情況を視察し、工場の労働者と軍隊の兵士はみなインド人である。しかし、インド人とイギリス人の待遇と生活水準はずいぶん異なる。[96] 時代がここまで至っても、イギリス人がいまだに積極的改革を行おうとしない」と。

二月一〇日、インド総督は蔣介石一行のために歓迎式典を催したが、蔣介石はその式典が厳かで、時宜に適しないと評した。[97] 蔣は歓迎宴会が封建宗法と帝政時代の遺物であると批判し、それはイギリスが失敗する原因の一つであると指摘した。[98] 彼はその儀式が改革されなければ、社会革命の要因になると認識した。二月二一日の日記「先週反省録」において、蔣はまた次のように書いている。「インドに来なければ、インドにおけるイギリスの偶像式政治の様子を見ることができない。イギリス人の礼儀作法は煩縟だと言われているが、実はそれは礼節ではなく、一種の専制時代の儀式に過ぎない。個人的に言うならば、人形芝居に等しい」。二月末の日記「今月反省録」において、彼はまた「インド総督の歓迎式典とインドにおけるイギリス人の腐敗と虚弱は、インドに行かなければ想像にも及ばないものである」と述懐している。以上から分かるように、蔣介石はイギリスの植民地支配に対して極めて批判的である。

二月一八日にガンジーと会談した時、蔣介石は中国革命の目的は世界で抑圧された諸民族を組織し、帝国主義を

打倒することにあると強調した。[99] 彼は「有色人種のことは有色人種自身によって解決されるべきである」と主張した。そのような主張は孫文の黄白人種闘争観と全く同じである。蔣介石はガンジーに対して、「この度、中国革命党員の資格でインドの革命党の友人と会談する目的は、いかにして組織し、侵略国家に反対するかという方法を検討するためである。それはすなわち中印両国が自由になる方法でもある」と伝えた。蔣から見れば、もし中国とインドの九億人が一致団結できれば、その勢力が白色人種に十分に対抗できるのである。

蔣介石の黄白人種闘争意識は、二月二〇日に彼がネールと会談した時も表している。蔣は「もし（中印）二つの民族が団結できれば、全世界の白色人種が一致団結しても、われわれを圧迫することができなくなる。反対にもし両国が団結できなければ、周りは虎視眈々としている帝国主義者ばかりで、両国は永遠に独立自由の望みがない。（中略）中印二つの民族が団結してこそ、はじめて解放され、全世界の白色人種と戦うことができる。そうすれば、長ければ一〇年、短ければ五、六年でわれわれの革命目標が実現できる[100]」と述べた。

蔣介石はムスリム連盟総裁ジンナーに対する印象がよくなかったが、インド訪問後、彼はイスラム国家の勢力を重視するようになった。二月二五日に蔣は日記で「イラン、エジプトとはすでに互いに使節を派遣している。そこでアフガニスタン、ネパールとブータンとも交渉して使節を派遣するべきである」と書いている。翌日の日記で、蔣はまた「近東と中東イスラム諸国との国交を積極的に発展させるべきである。今後アジアとアフリカにおけるイスラム勢力が日増しに強まってくるに違いない。もし彼らが科学と経済を重視できれば、その勢力が白色人種を植民地から追い払う可能性がある」と記している。ここからも分かるように、蔣介石がイスラム国家を重視するようになったのはそれらの国から白色人種の殖民支配を駆逐するためである。それは彼の反帝国主義意識と密接にかかわっている。

おわりに

本稿において、一九四二年の蔣介石のインド訪問について、以下のことを明らかにした。

第一は、蔣介石のインド訪問の目的である。従来の研究は、主に国民会議派に対する蔣介石の説得、中印間の軍事協力の強化という視点から分析した。しかし、それだけではなく、蔣介石がインドを訪問するにあたって、イギリスにインドの独立を承認させ、三民主義とりわけ中国革命の理念を宣伝しようとした。それこそ、蔣介石のインド訪問の主要目的であった。

第二は、蔣介石のインド訪問の背景についてである。従来の研究は主に英印関係に対する蔣介石の調停に重点をおいていた。しかし、蔣介石がインド訪問を決意したのは、英印関係を調停するためだけでなく、インドないしアジアの抑圧された諸民族の独立を助けるという歴史的使命感があったからである。結果的に、英印関係の調停が失敗し、インドの独立もすぐには実現できなかった。しかし、蔣介石は一貫して中国革命の理念を主張し続けた。

第三は、蔣介石のインド訪問の意義である。インド訪問期間の言論と日記から彼の中華思想、反帝国主義意識と黄白人種闘争意識の側面が見て取れる。蔣介石の中華思想、反帝国主義意識と黄白人種闘争意識は、表裏一体となっており、基本的に孫文より引き継がれたものである。なぜなら、蔣介石にとっては、孫文の政治理念を実現させることは彼の権力の正統性の強化に寄与することにもなったためである。孫文はインドを喚起するよう唱えたにもかかわらず、生涯インドには足を運ばなかった。その意味おいて、蔣介石のインド訪問はイギリス帝国主義に対する挑戦であり、中華民国外交史と中国革命史において重要な意義があるといえる。

〔附記：本稿は、二〇〇九年八月七－一〇日にカナダ Queen's University で開催された "Re-assessing Chiang Kai-shek: An international dialogue" に提出した論文を加筆修正したものである。ここでは会議主催者の Emily Hill 教授、Grace Huang 教授と Jeremy Taylor 教授に心から感謝を申し上げたい。また、Jeremy Taylor 教授には本報告のコメンテーターを務めていただいた。その他の参加者からも貴重なご意見をいただいた。あわせて謝意を表したい。〕

注

（1）呉俊才「蔣中正先生訪印與印度独立」、『蔣中正先生與現代中国学術討論集』第四冊、蔣中正先生與現代中国学術討論集編輯委員会編輯出版、台北、一九八六年、一八六－二一二頁。巴塔査亜「蔣中正先生対印度独立之貢献」、同前、二一三－二二七頁。陳謙平「一九四二年蔣介石訪印與調停英印関係的失敗」、『南京大学学報（哲学・人文・社会科学）』、一九九一年第三期、九〇頁。徐旭陽「一九四二年蔣介石訪印述評」、『文史雑誌』、一九九九年第四期、四七頁。季鵬「抗戦期間蔣介石訪問印度述論」、『民国档案』、二〇〇二年第四期、七八－八二頁。

（2）蔣介石日記はアメリカ・スタンフォード大学フーバー研究所に寄託されており、そのコピーは二〇〇六年より公開されている。ここでは日記を提供した蔣方智怡女史および日記の公開に尽力された郭岱君、宋曹莉璇両氏に敬意を表したい。なお、本稿で引用した蔣介石日記はすべてフーバー研究所が所蔵するものである。

（3）唐縦『在蔣介石身辺八年』、群衆出版社、北京、一九九一年、二五五頁。なお、王世杰日記によると、蔣介石インド訪問の発案者はルーズベルト大統領であったという。『王世杰日記手稿本』第三冊、中央研究院近代史研究所、台北、一九九〇年、二四六頁。

（4）林孝庭「二戦時期中英関係再探討：以南亜問題為中心」、『近代史研究』、二〇〇五年第四期、三二－五六頁。

（5）彭樹智「『民報』與印度的独立運動」、『南亜研究』、一九八二年一期参照。

(6) 湯志鈞編『章太炎年譜長編』上冊、中華書局、北京、一九七九年、二四三－二四四頁。
(7) 陳錫祺主編『孫中山年譜長編』上冊、中華書局、北京、一九九一年、五二九頁。
(8) 兪辛焞・王振鎖等訳『孫中山在日活動密録（一九一三年八月－一九一六年四月）』、南開大学出版社、天津、一九九〇年、八三－五八四頁。
(9) 林承節・林立「孫中山與印度革命」、『南亜研究』、一九九一年第四期。段雲章著『話眼世界的孫中山』、中山大学出版社、広州、一九九六年、二九三頁。
(10) 国父全集編輯委員会編『国父全集』第三冊、近代中国出版社、台北、一九八九年、四四頁。
(11) 「大亜洲主義」、前掲、国父全集編輯委員会編『国父全集』第三冊、五三五－五四二頁。
(12) しかし、戴季陶によると、様々な配慮により、中国における中印学会の事業は展開されなかった。それに対して、インドの中印学会は規模が大きく、成果も著しかった。陳天錫編訂『戴季陶先生文存』第四冊、中国国民党中央委員会、台北、一九五九年、三八六頁。
(13) 陳天錫編輯『戴季陶先生文存続編』、中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会、台北、一九六七年、三二六頁。
(14) 'A Note on the Development of Contact Between China and India', 特種档案一三－一－一四 Hoover Institution, Stanford University. 以下同。
(15) 「尼赫魯先生発展中印関係意見書訳文」、特種档案一三－一－一四。その際、蔣介石は、朱家驊、陳立夫、鄭彦棻、李維果、葉溯中五人がネールと検討するよう命じた。
(16) 「関於尼赫魯発展中印関係意見書擬定試行辦法請予簽核施行」、特種档案一三－一－二一
(17) 第二次世界大戦勃発後、イギリス政府はインドの非協力運動に悩まされ、中国に調停するよう期待した。そのため、蔣介石は戴季陶をインドに派遣し、戴は一九四〇年一〇月一九日に出発し、一二月二三日に帰国した。その間、戴はビルマのラングーン、インドのカルカッタ、ニューデリー、ベンガルなどを訪問し、タゴール、ガンジーなどに面会した。しかし、戴季陶がいかに英印関係を調停したかに関する研究は不十分である。黎潔華・虞葦著『戴季陶伝』、

広東人民出版社、広州、二〇〇三年、二九五－二九七頁。

(18) 秦孝儀総編纂『総統蔣公大事長編初稿』、巻四（下）、台北、一九七八年、七一六頁。

(19) 蔣介石日記、一九四二年 Vol.1, General.

(20) 「大亜洲主義」、前掲、国父全集編輯委員会編『国父全集』第三冊、五三五－五四二頁。

(21) 蔣介石日記、一九四二年一月三一日「上星期反省録」。

(22) 蔣介石日記、一九四一年一二月九日。

(23) 蔣介石日記、一九四一年一二月二七日「上星期反省録」。

(24) 前掲、秦孝儀総編纂『総統蔣公大事長編初稿』巻四（下）、七九〇－七九一頁。秦孝儀主編『中華民国重要史料初編—対日抗戦時期』第三編戦時外交（三）（以下『戦時外交』三と略称）、中国国民党中央委員会党史委員会、台北、一九八一年、九七頁。

(25) 前掲、『戦時外交』三、九八頁。

(26) 秦孝儀総編纂『総統蔣公大事長編初稿』巻五（上）、台北、一九七八年、一頁。

(27) 胡適日記、一九四二年一月一日。季羨林主編『胡適全集』第三三巻、安徽教育出版社、合肥、二〇〇三年、四四九頁。

(28) 蔣介石日記、一九四二年一月「本月反省録」。

(29) 蔣介石日記、一九四二年一月九日、一四日、一七日、二〇日参照。

(30) 浅井治平著『立ち上がるインドの全貌』、帝国書院、一九四四年、九三頁。

(31) 同上、四三頁。

(32) 前掲、『戦時外交』三、三四三－三四五頁。

(33) 蔣耘「西蔵地方政府阻撓修築康印公路與抗戦期間的中英関係」、『中国蔵学』、二〇〇六年一期、一二頁。

(34) 蔣介石日記、一九四一年一二月二七日、一九四二年一月「本月大事予定表」、二月七日「本星期予定工作課目」参照。

(35) 長崎暢子「東南アジアとインド国民軍」、『岩波講座近代日本と植民地五　膨張する帝国の人流』、岩波書店、一九九三年、一五九頁。
(36) 中島岳志『中村屋のボース』、白水社、二〇〇六年、二六六頁。
(37) 前掲、中島岳志『中村屋のボース』、二六六頁。長崎暢子「インド国民軍の形成」、長崎暢子編『南アジアの民族運動と日本』、アジア経済研究所、一九八〇年、一五頁。
(38) 前掲、長崎暢子「インド国民軍の形成」、長崎暢子編『南アジアの民族運動と日本』、二一頁。
(39) 秦孝儀主編『中華民国重要史料初編—対日抗戦時期』第三編戦時外交（一）、中国国民党中央委員会党史委員会、台北、一九八一年、一五四－一五五頁。
(40) 前掲、『戦時外交』三、三五七頁。
(41) そのほかに、ヒンズー・マハサバ、カークザール党、前衛ブロック、ナショナリスト党、国民自由連盟という党派がある。島田巽『最近の印度』、朝日新聞社、一九四二年、三九－四一頁参照。
　なお、藩王諸国はインドの三分の一の面積と四分の一の人口を占めている。その数は五八〇あまりに及ぶ。前掲、浅井治平著『立ち上がる印度の全貌』、四二頁。
(42) 前掲、長崎暢子「東南アジアとインド国民軍」、一五八－一五九頁。
(43) 前掲、林孝庭「二戦時期中英関係再探討：以南亜問題為中心」、四三頁。
(44) 前掲、『戦時外交』三、三七二－三七三頁。
(45) 同前、四〇四頁。
(46) 同前、三六三頁。
(47) 同前、三七八頁。
(48) 会談の記録は、同前、三五一－三五八頁参照。
(49) 蔣介石日記、一九四二年二月五日。

(50) 蔣介石日記、一九四二年二月二一日。
(51) 前掲、『戦時外交』三、三五八－三六五頁。
(52) 同前、三七七頁。
(53) 同前、四〇五－四一一頁。
(54) 当時、インドで教育を受けたことのある男性は一三パーセントに過ぎず、女性は九七パーセントあまりが非識字者である。英語のできる男性は二パーセントにも達しておらず、女性は千分の二に過ぎなかった。前掲、浅井治平著『立ち上がる印度の全貌』、三四九頁。
(55) 蔣介石日記、一九四二年二月一〇日、一一日。
(56) 蔣介石日記、一九四二年二月一五日。なお、蔣介石に宛てるガンジーの手紙は、前掲、『戦時外交』三、三六五頁参照。
(57) 会談記録は、前掲、『戦時外交』三、四一一－四二三頁。
(58) 蔣介石日記、一九四二年二月一九日。
(59) 全文は前掲、『戦時外交』三、四三一－四三三頁参照。なお、「インド国民に告げる書」は宋美齢によって英語で代読された。
(60) 中国社会科学院近代史研究所訳『顧維鈞回憶録』第五分冊、中華書局、北京、一九八七年、七〇頁。
(61) 蔣介石の顧維鈞宛ての電報は、前掲、『戦時外交』三、四三四－四三八頁参照。
(62) 前掲、『戦時外交』三、四三九－四四〇頁。
(63) 前掲、島田巽『最近の印度』、一〇〇頁。
(64) 前掲、『戦時外交』三、四四八頁。
(65) 蔣介石日記、一九四二年三月「本月反省録」、一九四二年四月一二日。
(66) 蔣介石日記、一九四二年四月一三日。

(67) 前掲、『戦時外交』三、四五七－四六〇頁。
(68) 蔣介石日記、一九四二年六月一八日。
(69) 蔣介石日記、一九四二年六月二〇日「上星期反省録」。
(70) 前掲、『戦時外交』三、四六〇－四六一頁。なお、六月一九日に蔣介石は宋子文に親書を送った。その文意は二通の電報におおよそ同じである。親書は T. V. Soong Collecting, Box58, File16, Hoover Institution, Stanford University 参照。
(71) 前掲、『戦時外交』三、四六二頁。
(72) 同前、四六五頁。
(73) 同前、四六六頁。
(74) 同前、四六七頁。
(75) 陶文釗・楊奎松・王建朗『抗日戦争時期中国対外関係』、中共党史出版社、北京、一九九五年、三三六－三三七頁。
(76) 前掲、『戦時外交』三、四七二頁。
(77) 同前、四七四頁。
(78) 同前、四七五頁。
(79) 同前、四七六頁。
(80) 談話記録は前掲、『戦時外交』三、四七六－四八一頁所収。蔣介石日記によれば、蔣介石がシーモア大使と会見したのは一一日である。しかし、『戦時外交』三に収録されている談話記録の日時は一二日である。ここでは、日記の日時に依拠する。
(81) 前掲、『戦時外交』三、四八三頁。
(82) 同前、四八五－四八七頁。
(83) 蔣介石日記、一九四二年九月一四日。

(84) 前掲、陳謙平「一九四二年蔣介石訪印與調停英印関係的失敗」、九四－九五頁。なお、徐旭陽も調停が失敗した原因として三点挙げているが、陳との意見が基本的に一致している。前掲、徐旭陽「一九四二年蔣介石訪印述評」、四九頁。
(85) 前掲、『戦時外交』三、四七八頁。
(86) 同前、四三六頁。
(87) 同前、四三七頁。
(88) 同前、四三七－四三八頁。
(89) 前掲、中国社会科学院近代史研究所訳『顧維鈞回憶録』第五分冊、二三頁。
(90) 蔣介石日記、一九四七年「民国三十六年自反録」。
(91) 蔣介石日記、一九四二年二月二二日。
(92) 蔣介石日記、一九四二年二月「本月反省録」。
(93) 朱漢国主編『南京国民政府紀実』、安徽人民出版社、合肥、一九九三年、七八〇頁。
(94) 同前、七八二頁。
(95) 翟韶華主編『中華民国史事紀要：中華民国三十一年（一九四二）一至三月份』、国史館、台北、一九九二年、七〇〇－七〇三頁。
(96) 当時の研究によれば、インドにいるイギリス人官吏の平均年俸は四九二ポンドで、官庁に勤めるインド人の平均年俸はイギリス人の約二〇分の一に過ぎなかった。前掲、浅井治平著『立ち上がる印度の全貌』、三五一頁。
(97) 蔣介石日記、一九四二年二月一〇日。
(98) 蔣介石日記、一九四二年二月一一日。
(99) 前掲、『戦時外交』三、四一八－四二〇頁。
(100) 同前、四二九頁。